2020.1.8 夕刊
〔第3種郵便物認可〕
毎日 cultu

毎日芸術賞の人々 ②

宇多喜代子さん

文学Ⅱ部門（詩・短歌・俳句）
第8句集『森へ』（青磁社）をはじめとする
これまでの句業

観念の「森」は安息の場

うだ・きよこ　山口県徳山市（現・周南市）生まれ。俳誌「草樹」会員代表、現代俳句協会特別顧問。主な句集に『象』（蛇笏賞）、『記憶』（詩歌文学館賞）など。日本芸術院会員、文化功労者。読売俳壇選者。84歳。　＝加古信志撮影

万事に対する透徹したまなざしと、農事や歳事への深い造詣から紡がれる言葉の宇宙。伝統、新興、前衛の枠を超えた広い視野で評論活動も行い、自らに忠実に句業を重ねてきた。「大阪で俳句を始めて60年以上、一日も欠かさず関わってきたものですから、俳句は手足の続きのようなもの。句集を評価していただけるのは本当にうれしい」とほほえむ。

祖母が親しくしていた禅寺の僧侶・遠山麦浪の手ほどきによって18歳で俳句の道へ。30代半ばの1970年、新興俳句系の俳誌「草苑」の創刊に参加し、主宰する桂信子に師事した。「厳しかった。凜としていました。時流におもねることなく、自分を貫く姿勢を俳人として学びました」。45歳で第1句集『りらの木』を刊行。以後、毎回テーマを決めて句集を出してきた。

第8句集『森へ』のテーマは時間。「1年も人の一生も地球の一生も、みな一瞬一刻だと思うと妙な気分がして」。観念の「森」こそ、自らの安息の場であり再生のよすがだという。「祖父母が昔、山は水のかたまりだと言って、子供ながらに面白いことを言うなと感じていた。森へ入るとしっとりするでしょう？息がしやすいんです。生き物すべてにとって大事である水。その水をたくわえている森は私の自然観のもとだろうと思います」。森羅万象の句は時空を自在に往還する。

一瞬が一瞬を追う雪解川
球形の大地に凝りて露の玉

戦争の記憶は今なお色濃い。9歳の時、故郷の山口県で空襲に遭い、死を近くに意識した。「戦争体験は私の骨の髄の奥まで入り込み、逃れられないもの」。夏になると当時見た光景がよみがえる。

八月に焦げるこの子らがこの子らが

「人の宝に恵まれた人生が私の誇り」と語る。中でも大きな影響を受けたのが和歌山・新宮出身の作家、中上健次（46～92年）だ。新宮の句友を介して知り合い、中上が開設した文化組織「熊野大学」にも参加した。「健次とは日常のつまらない話ばかりしましたが、彼は俳句の話をよく聞いてくれた。私に俳句を自覚させてくれた人でした」

歴史に埋もれた俳人の評伝も手がけ、俳句史研究や歳時記に関する著作も多い。2006年から6年間、現代俳句協会会長を女性で初めて務めた。「俳句の歴史を残したい」と昭和俳句の作品年表を会員と編集。稲作への関心も強く、70歳まで自ら田を耕した。「稲作に大事なのはお日様と水と風。俳句に欠かせない歳時記は稲作生活がもとにあります」

年齢を重ね、当たり前のことを当たり前に詠めるようになったと今、感じている。「年をとると頑張らないから、自然と句におかしみがでてくるんでしょうね。空を飛ぶ鳥も地をはう蛇も、身辺のものはどれもみな面白く、句題にならないものはない。俳句は退屈がないですよ」【清水有香】

＝つづく